



# 東京日々新聞

四百九十八号



越後の女子の其情雪と共に淡く帷子地と共に薄れれば  
 古来より多く娼妓と此國小需むと然るも世移り物  
 換て今の該国秋部の藝娼妓も真情を以て客小遇  
 する者色とせざば茲に新潟港長濱某の雇ひ藝妓たんと  
 云ふ者千金と擲の豪客と厭ひ丁稚中より一青年ふ  
 意着し盆踊りの夜ふ紛き住居馴らする新潟と跡  
 白浪と道彦と跡と跡と寺泊り結赤繩の出雲寄止しや尼瀨  
 とるれどと離れし世と取らば此手拍や  
 拍崎早往々て名はしり不孝の罪の  
 親をらぬ越て加賀路ゆりう過幾  
 夜に掖ふ伏見より浪花よるを  
 野行ち座して食ふ山ろくで  
 固より寒さ懐尽と詮方中泣  
 不の死へ未来で逢見と互ひの運の  
 天満橋既入水と決せと道往  
 人介抱らとたれい再度苦海の  
 勤め男のやそ人カ車稼と追と  
 多し困難と長濱氏不聞しと  
 車夫との縁と曳く古郷へ  
 帰り錦の帯をちて又りや河竹の  
 浮一魁めとるせりしと

山々亭有人記



具足屋

渡辺彫栄

一萬齋  
 女方幾魚

